

2020.07.07.

T.Kobayashi

## 球磨川雑感

この夏の集中豪雨による被害の第一号は、熊本県の球磨川となってしまった。

昨年の阿武隈川に引き続き、「又しても起きてしまった大惨事」ということ以上に、行ったことがある土地で実際の景色が目浮かぶので、「驚き」として頭に入ってきた。

球磨川との初めての関わりは……

高校の卒業試験が終わってから卒業式までの間を利用して、3人の友人との九州一周旅行。

四日目、都城を出た夜行列車は、吉都線・人吉線経由門司港行。暗闇の中を走り抜けただけだったが、

九日目には門司港発の鹿児島線・吉都線経由都城行夜行列車の世話になった。熟睡の後、早朝の球磨川を遡って人吉で朝食用に駅弁を買った。おおかたの駅弁が100円～120円だった時代に、「洋食弁当」と名がついた150円の駅弁は、貧乏旅行には大奮発の偉業だった。

球磨川との二度目の出会いは昭和58年正月に熊本・宮崎県境の国見岳と市房山の連続登山を試みた時のこと。福岡市の自宅から車で熊本県の松橋ICまで行き、内陸の山中を縫うように作られた内大臣林道に入り国見岳登山口まで一日がかりの行程。車中泊をして翌日は国見岳をピストン。

三日目は早朝、椎矢峠を越えて宮崎県側の椎葉村に入り、耳川を下って上椎葉ダムへ。小崎川の谷を遡って湯山峠を越えて再び熊本県へ入り、市房山登山口へ。

市房山ピストンの後、球磨川に沿って人吉・球泉洞を経て八代IC経由で福岡の自宅へ、という車でなければ実現できないハードな山旅だった。

市房山から下界に下りて人吉の盆地へ、盆地の西端から突然球磨川に沿った両岸が迫る峡谷。ようやく視界が得られる広がりに出た所が八代だった。

ニュースの報道を見ながら地形図で確認を続けた結果、どこでどんなことが起きてしまったのかが見えてきた。

球磨川は、最上川(総延長229Km 平均流量437 m<sup>3</sup>/秒)・富士川(総延長128Km 平均流量63 m<sup>3</sup>/秒)と並んで「日本三大急流」のひとつに数えられている。総延長115Kmなので、本州の川と比較すると、どちらかというところ中程度の河川ということになるのかもしれない。平均流量は「104 m<sup>3</sup>/秒」。

熊本県・宮崎県・鹿児島県の県境の複雑に入り組む山ひだに降る雨を集めた川に、球磨川と名がつくのが広々とした人吉盆地。

人吉盆地を抜けると、山間の隘路とも言うべき「峡谷」に入り、水流は圧力を増す。複雑に屈曲した峡谷は河口近くまで続き、その間にもいくつもの流れを合する。

中流の急流の峡谷が流すことができる流量には限りがあり、短時間で想像を絶する豪雨に見舞われると、どこかで滞留(滞流?)が起きる恐れがあるということなのだろう。

峡谷で滞った水流により、隘路の入口である盆地の西端(渡付近)では川の水は、下流に行く量を凌ぐ水量が上流から押し寄せる。さらに滞留は上流に影響し、いくつもの支流が本流に合する合流点で合流できない水は行き場を失い、脆弱な土手を削り取り始める。また、長い隘路で圧力を増した水流は隘路を抜けた途端にはじけるように平野へ飛び出す。飛び出したところが直線であれば一気に海へ飛び込むのだが、そこに屈曲があればさらに奔流に弄ばれる結果になる。

2019年に発生した阿武隈川の大水害とよく似た構図を感じる。

奥那須・会津・阿武隈山地などから集めた水が郡山周辺の町を浸し、「阿武隈川下り」で有名な峡谷で圧力を増し、大きくカーブしながら合流を重ねて丸森町ほか多くの地域で巨大な災害をもたらす結果となった。

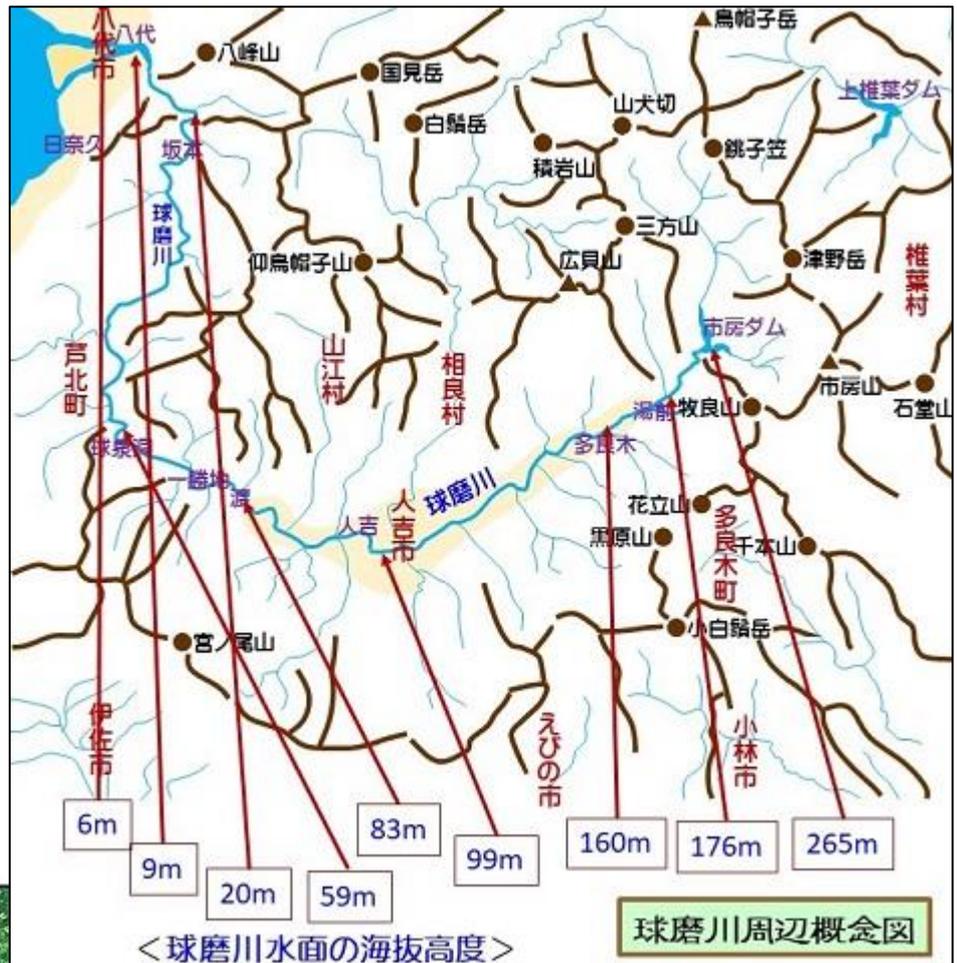
年々「史上例を見ない極地的・長期的豪雨」が各地で発生しており、「天災の形」と「人々の暮らす場所」との折り合いのあり方が問われているように感じる。人間が古代より持ち続けている「課題」なのかもしれない。

球磨川の主要地点の水面の高さ

地点	八代海	新萩原橋	坂本	球泉洞	渡	人吉橋	多良木	湯前	市房ダム	本流水源
河口からの距離	0	5Km	14Km	39Km	48Km	56Km	78Km	84Km	90Km	110Km
区分	河口	平野	急流の峡谷			中流の盆地			水源山地	
水面の高さ*	6m	9m	20m	59m	83m	99m	160m	176m	265m	1000m?

\*水面の高さ=国土地理院地形図による、球磨川水面の高度(海拔:m)

<右画像>  
球磨川周辺概念図



<下画像>  
航空写真で見る  
球磨川と人吉盆地

